二〇一一年一〇月一八日（参加者一六名）

秋天へ反る蘭亭の飛簷かな　はく子
園児らのどんぐり比べ手をひろげ　〃
瀬を速む谷へなだるる草もみぢ　〃
露けしや王義之の書の斯く古りて　〃
澄む水に羽広げたる天使像　〃
好天にハーブの香充つ秋の園　きづな
秋渇く錆つく蛇口ひねりては　〃
山荘へいざなふ径の野菊かな　〃
裸婦像の双手をかざす天高し　せいじ
夕映えの刈田にのこる潦　〃
図書館へ萩のこぼるる径辿る　〃
たもとほるせせらぎの径石蕗黄なり　菜々
王義之の筆洗池澄めりけり　〃
姫さまの散歩道かも白式部　〃
群青の空悠然と鷹高し　宏虎
大鷲の空傾けて急降下　〃
菊花展裏にバケツと杓覗く　〃
秋草の園カタカナの札多し　満天
秋天をつきあげてをる飛簷かな　〃
東山連峰古都の秋惜しむ　〃
井守の尾消えて溝そば揺れ残る　有香
風切って走るジョギング草紅葉　〃
左見右見して風を待つ秋桜　明日香
秋の雲投網広げしごとくかな　〃
秋晴の巨船ハングル文字見ゆる　ひかり
赤とんぼついと翔つとき翅光る　〃
名にしおふ舞子の浜の新松子　百合
神木にもたれてをれば小鳥来る　〃
王義之の臨書に秋思憑きにけり　わかば
谷川の流れへそよぐ花芒　〃
蹲の底まで届き秋日射す　つくし
振り絞るごと細々と残る虫　こすもす
聞き役もおしゃべりもゐて芋煮会　泰三
二つ三つくわりんを飾る観光課　うつぎ
石叩仏足石を教へけり　〃

定例句会みのる選

二〇一一年一〇月一八日（参加者一六名）